

tab

No.
33

2
0
1
2
/ 06
/ 15

後藤美和子 / 木村和史 / 野村龍 / 長尾高弘
福島敦子 / 岩田英哉 / 水島英己 / 中村剛彦
秋川久紫 / 倉田良成

櫛 = *Machilus thunbergii*

cont.

詩篇

- 後藤美和子：水渡り／01
野村 龍：仮住まい／02
秋川久紫：パレード・精錬／03
福島敦子：帰ろう／05
長尾高弘：犬の死／07
中村剛彦：ろうそくの時間／12
水島英己：雨の日／13
倉田良成：ヤムタラ帝紀／15

文

- 木村和史：断食／18
岩田英哉：Hart Craneを読む—midnight press poetry rounge 2012/06/02-4s／20
中村剛彦：象徴の魔力 四／24

あとがき集／28

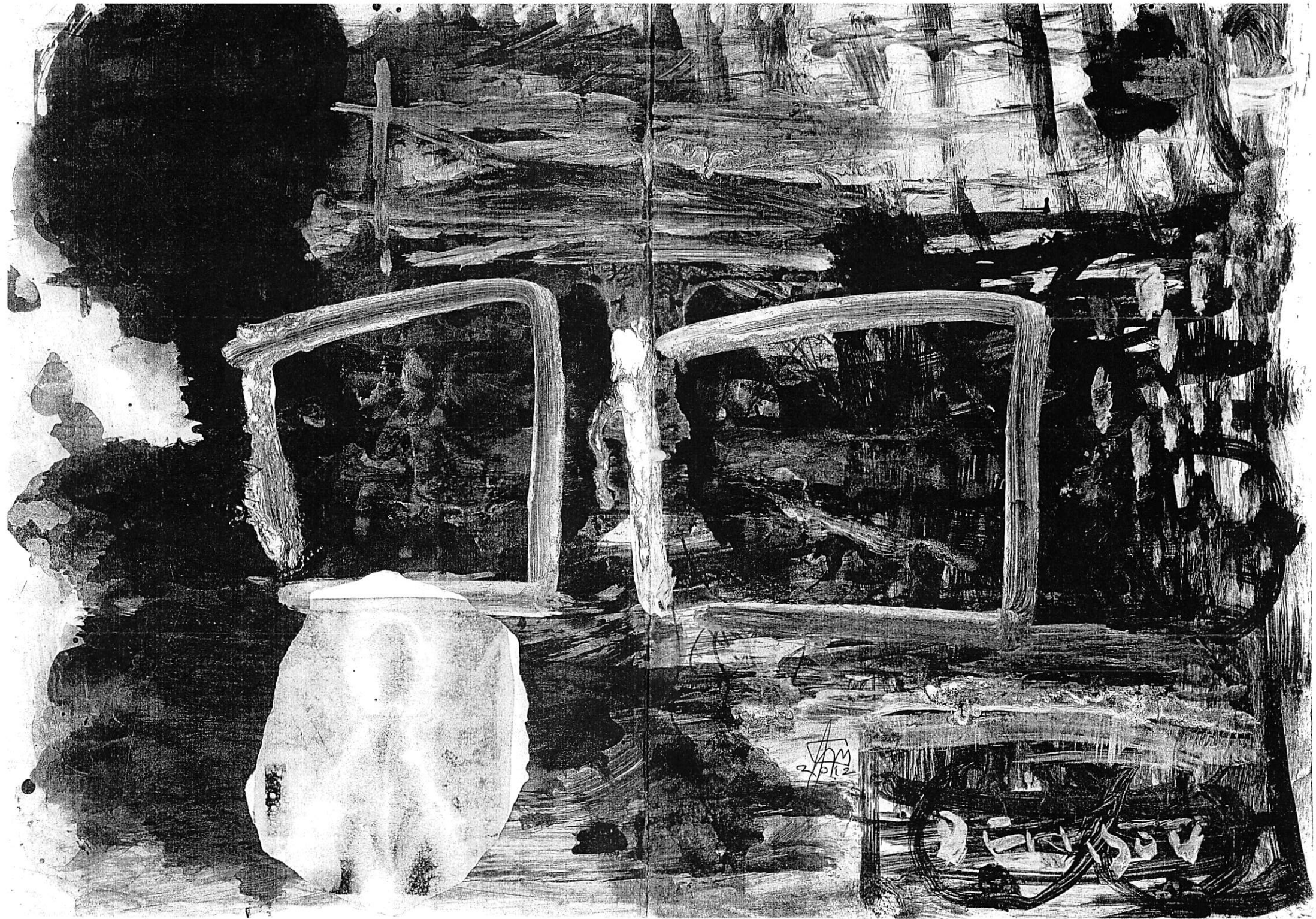
画：和田彰

誌第33号／2012年6月15日

編集発行人／倉田良成

F 230・0078 横浜市鶴見区岸谷4-25-25 鶴見岸谷ハイツ201

Eメール／kateis111@k3.dion.ne.jp



後藤美和子

水渡り

トンネルは苦手なのだ
彼女は長々と語ってくれた
そのために私たちは
ずいぶんと遠回りをして歩いた
やがて水溜まりが見えて
それが海の先鋭であることに気づく

「海峡」の定義を私は知らず
彼女はそれをそらで言えた
世界で一番細い海峡を
小人たちの船が通っていく
すると私たちのいた島は
パズルのように二つに割れた

黄色い花の羅列
ミモザの下で私は
好きだったスカーフを巻いている
階段を上り
飛んでいってしまったそれを
彼女はあちこちの道に問いかけながら探した

他より水は澄んでいた
少しぬるくて優しかった

(皆既蝕六三)

野村龍

仮住まい

蝸牛の亡骸が 一滴残らず流れ出した後
殻のなかに 間借りをしています

持ち物は ほとんどありません
コンピュータ一台と 本が数冊

でも これだけあれば
引き籠もりには 十分すぎるくらいです

(殻に 護られないと 歌うことが出来ません
神経が ホワイト・アスパラガスのように脆いので)

殻は 蜜に満たされ ここちよく
ゆるく渦巻いて 宙空に留まり

彼方では サグラダ・ファミリアが
造られては 崩れ 造られては 崩れ

貯金から 書きためたものが
少しずつ 引き落とされてゆくのです

パレード

あの時、雑居ビルの一角の音楽室に何を忘れて来たのか、どうしても想い出することが出来ない。それは巨大なベッドだったようにも思えるし、彎曲した線路の断片であったような気もするのだが、本当は緋色のカチューシャだったのだと言われると、俄にそれを否定することが出来ない。そこにはいつも白痴の女が蹲っていて、時折、ジルバを踊るようなしぐさをして見せるのだが、この辺りに女の素性を知る者はなく、女の過去や未来を敢えて覗き視してみようと考える者も存在しない。さしあたって言えるのは、仮に今ここで、マリンバやスネアドラムの上で寝そべったり、バク転をしたりして遊ぶ音符たちを密かに拐かそうと試みたとしても、恐らく芳しい成果は得られないであろう、ということだ。

女はまるでそれが唯一の仕事なのだ、といった風情で脚を組み直し続けている。

通り路は迷い路。枯れ枝は極彩色の装いを凝らし、火吹き男はモノトーンの薄衣を纏って天空を突く。やがて夜が脆くなり、徐々に輪郭を失い始めると、埃まみれになって朽ち果てた五線譜ですら、気品を湛えた忘れ形見に変貌してしまふ。ピアノの旋律が生殖の苦悩を、ウッドベースの嗶れ声が崩壊の心地良さを奏でるためにあるとしたら、クラリネットの気紛れは一体何を賞賛するためにあるのだろうか。数奇者の黒猫と破滅型の白猫が織り成す諍いの市松格子。聖者が聖者で無くなる瞬間、ポップコーンのように弾き返される葛藤を閑かに抱き寄せながら、いつしか重たい扉が僅かに開き、虚無と眠りたがる凡庸な煽動者がこの打ち棄てられた部屋に紛れ込むのをただ辛抱強く待つしかないのだろう。

精錬

夾雑物への視座は、濁いた空の下で切望される。それは、銀やプラチナに見られるのと同等の求心性を持ち、ありふれた溶融を通じてではなく、しばしば律動の形態を模倣しながら強度を増してゆく。無論、そこには幾ばくかの反転性や未解析の毒性が含まれており、偽計への抵抗感もたらす鈍化のための蓋然性の高さがある。

ブラックアウト。ここでは、火薬の代替手段として、忠告と警告とが貼り合わされたバイメタルの如き言辞が用いられる。ほんの些細な仕掛けによって、心など容易に毀れてしまう。

不意にしなだれかかる体温の重みを受け止めたくないのなら、正眼の構えを棄て、傀儡子になって踊り続けなければならない。落日を遊戯の色に染めて、極限まで抒情を鍛えていかなければならない。

精錬の目論見書はナイーブな良識に庇護されて流布していく。アクティブスクリプトなどではなく、陽射しを遮る欲望のカーテンや往来を練り歩く傾奇者の高下駄をこそ真っ先に無効とすべきだろう。

かつて、複製と加工は人類の叡智の産物であった。少なくとも、そこに怪しげな詐術を混入させたり、これを犯意の実現手段としたりすることを目的に考案されたものではなかった。

例えば、子供たちが隠匿訟務官とか、破綻予報士などを目指す世が訪れたなら、幾分でも夾雑物を除去することが出来るのだろうか。まずは、食材から血を抜くようにして臭味を洗い流し、あるいは正体が無くなるまで異物を噛み砕いていく術を覚えよう。僅かでも有効成分があるなら巷に電解を施し、果敢に精錬してみるのだ。

福島敦子

帰ろう

帰ろう

と言うとうつろな父の瞳に　ばあーっと光が射す
笑みがこぼれる

あの山の向こうではなく

海の向こうではなく

天国やお浄土でもない

父がいちばん帰りたいところへ
帰ろう

車椅子を押していたら

泣きそうになった

わたしの声にならない声が

悲鳴を上げて　施設の廊下を渡っていく

誰にも見えない　聞こえない

ほんとうはもうこれ以上

父の介護はしんどいなあ

わたしは　えらそーにはなく

弱々しく苦しもう

うなだれて車椅子を押していると

わたしの中になぜだか　ばあーっと光が射す

わたしが消えて

軽くなつて

見えない力が車椅子を押している

帰ろう

家に帰ろう

車椅子ごと軽自動車に乗せて

エンジンをかける

犬の死

うちはもともと犬を飼っていたいい家ではなかったのかもしれない。

十三年前、親しい家で雌犬が何匹もこどもを産んだ。

ゴールデンリトリバー。

かなり大きくなる犬種だが、こどもは小さくてかわいかった。

小学校に入ったばかりの息子が飼いたい飼いたいと大騒ぎをして、

いのちの尊さを学ぶのもよいだろうということで飼うことになった。

息子がジャックという名前を付けた。

三か月まではまだ免疫ができていないからというので家に置いておいた。

誰も犬を飼ったことがなかったので、まるで勝手がわからなかった。

最初はどこでもトイレをしてしまうので大騒ぎだったが、

教えたら、シートにするということを知った。

やんちゃなやつで、息子が飼っているというより、

オレの方が偉いんだという顔をしていた。

生後三か月になって初めて動物病院に連れていった。

こちらが何も知らないの、獣医は明らかに呆れたという顔をしていた。

(彼とはその後親しくなったが、犬よりも先に亡くなってしまった)

注射をして散歩に出られるようになった。

それ以来、ジャックは庭で暮らすようになった。

息子では引きずられてしまうので、散歩は私の担当になった。

ジャックは人懐こい犬だった。

庭の横を人が通ると走って行って柵に前足をかけわんわん吠えたが、

ちぎれそうなほど尻尾を左右に振っていた。

犬嫌いな泥棒には効果があったかもしれないが、

番犬としては役に立ちそうになかった。

散歩でも、かまってくれの人があると、前足を伸ばして抱きつこうとした。

この癖はどうしても直らなかった。

家のなかに入れて遊んでやらなかったからだろうか？

十一歳というと、犬としてはかなりの高齢だが、

それまでずっと庭からなかには入れなかった。

そろそろ老いて外に置いておけなくなるかもしれないと思っていたときに、地震が来て原発がとんだ。

放射能の雲がやってくるぞというので、

ジャックも家に入れることにした。

赤ん坊のときに使っていたケージを引っ張りだして玄関に置いた。

最初の夜はいやがって下に敷いたトイレシートをびりびりに破った。

だからシートはトイレの下に敷くことにしたが、

二晩目からはおとなしく寝るようになった。

地震から一か月後には、晴れた昼間は庭に出すことにしたが、

雨の日と夜中はケージのなかにいた。

ケージのなかでは身体じゅうをなめていた。

トイレは一度だけ夜中に漏らしたが、

それ以外は散歩に出たときにした。

一度だけ、家のなかでケージから脱走したことがあった。

脱走したといっても、要するに私が扉を閉めそこねたのだろうが、

外出から帰ってくると、ケージの外からお帰りと尻尾を振っていたのだ。

急いで彼をケージに入れて、家じゅうを点検すると、

寝室で二か所に小便をして、息子の部屋でおもちゃを噛みちぎり、

和室で紙袋を噛みちぎっていた。

お帰りのときの表情にやけに充足感があったような気がした。

こっちの思い込みかもしれないが。

庭にいたときは散歩は日に一度、それも雨が降ったらお休みだったが、庭では大も小もやりたい放題だったのでそれでよかった。

夜に家に入るようになってからは、

トイレのために朝晩かならず外に出るようになった。

朝の散歩が終わると庭に出て、

夕方私が帰ってくるのと庭からケージに入れて食事。

それからしばらくして夜の散歩に出た。

もつとも、雨の日は朝の散歩からケージに戻り、

夜の散歩は庭で小便をさせるだけで帰っていたが。

五月十一日の朝までは、そうやって散歩に出ていた。

その日は晴れていたので散歩から帰ると庭に出した。

夕方、ジャックをケージに入れようと声をかけると、

庭の入口の柵までは出てくるのだが、

お尻をたたいてケージに向かわせようとする、

するりと逃げて庭に戻り、こちらを見ていた。

今までもそういうことは何度かあった。

一度家に入ってしまったからもう一度迎えにいくと、

また同じようにするりと逃げて庭に戻り、こちらを見ていた。

そこで罰としてしばらく庭に置いておくことにした。

そのあとで家人が帰ってきたときには、

やはり柵のところまで出てきて鼻をつきだしていたという。

いつもより五時間ほど遅れてケージに入れた。

餌をががつ食べて、身体をなめ始めた。

遅くまで外に出ていたので、夜の散歩は省略することにした。

いつもなら散歩のあとに飲む水を入れてやったが飲まなかった。

見上げる顔が「散歩には行かないのか?」と言っているように見えた。

翌十二日の朝、散歩に連れていこうとすると、

ケージのなかでころっとした大便をしていた。

おやおや大変だと声をかけ、大便を始末してから、

いつものように首にリードをかけて外に出ると、後ろ足がよろよろして、玄關を出たらすぐに倒れてしまった。

そのまま通路に這いつくばってしまったので、

いつも日向ぼっこをしていた庭のウッドデッキまで抱きかかえていき、もう一度立たせてみようとする、

しばらくは立てたがやはり倒れてしまった。

ケージよりはましかと思ひ、ウッドデッキで寝かせていた。

家人にも知らせ、交代で様子を見ていた。

いつもは夜にしか食べていない餌を持ってきたが食べなかった。

水は、妻が容器を口元まで近づけてやったら少し飲んだが、

その後はもう飲まなかった。

一度だけ位置を変えたようだったが、

そこで小便を漏らしていた。

夕方、また抱きかかえてケージまで戻したが、

昨日まで食べていた餌はもう食べなかった。

十時頃、餌を片付けて水に換えたが水も飲まなかった。

それでも首を持ち上げて少しキョロキョロすることもあった。

少しそうすると疲れるらしく、ぐったりしていた。

十一時頃、水に首を突っ込んで寝ていたので、

急いで水をどけたが、もう首を動かすこともなかった。

ケージに戻して二日目以来初めて敷いたトイレシートが黄色くなっていた。

じっと見ていると、呼吸をして身体が揺れるように動いている気がしたが、

そのまま見ていると、もう呼吸をしていないようにも見えた。

身体を触ると、元気だったときよりは明らかに冷たくなっていたが、

前足の付け根のあたりはまだ温かった。

十三日の朝、ケージのなかを見ると、昨日と同じ姿でジャックは寝ていた。

身体を触ると、明らかに冷たくなり、固くなっていた。

やはり、十時から十一時までの間に死んだのだろう。

あと二か月弱で十三歳になっていたはずだった。

ネットで調べると、市の斎場で火葬にしてくれることがわかった。ダンボールで棺を作り、底に水漏れ防止のビニールを貼りつけた。納棺する前に線香を焚いて家族全員で手を合わせた。遺骸をタオルで包んでダンボールの棺に収めた。その棺を車のトランクに入れて斎場に向かった。合同葬儀と個別葬儀の二種類の方法があり、合同なら遺骨は返されないが、個別なら返される。合同を選び、遺骨が返らないことを念押しされ、遺骨はほかの骨といっしょにコンクリート建材の材料になると説明された。斎場にも焼香の設備があった。焼香が済むと、係官が扉の向こうにジャックの棺を運んでいった。これですべてが終わった。十三年たっても慣れなかった飼い主のために、手間をかけさせずに死んでいった。帰りの車中では、

「これから数日したらジャックが死んだって実感がこみ上げてくるのかもね」

などと言っていた。

実はもうそれを少し感じていたのだ。

棺のダンボールの準備をしていたときに、ケージのなかで寝ているジャックに、いつものように「おじゃぐ」と声をかけた。

それから三十秒後に、死んだことを思い出し、彼の棺を準備していたことを思い出した。

そして、思いがけず涙が出てきた。

中村剛彦

ろうそくの時間

はじめて見た少年の裸の
そのほそく白い曲線の付け根のなんという
やさしさ

この手は震えながら
その無垢の光源に触れて
瞳は崩れ落ちる

生を取り戻すための
あらゆる方法はとりつくされた
いつわたしは去勢されてしまったのかと
玩ばれる

苦みの快感の
儀式に浸る

目を閉じ
いつか世界はあまりに美しかったと
思い出せるなら
そう、目を閉じ
わたしはお前の柔らかい詩を口に含みながら
噛み殺してしまおう
もっと犯してほしいのに……

炎は消えてしまおう
春の夜の雨音が
からだを濡らし
このままの姿勢で
闇に染まりながら
死んでしまいたい

水島英己

雨の日

「雨が すきか

わたしはすきだ

うたを うたわう」

重吉は相原の大戸という所に生まれた。

小さな土蔵の記念館がある

いつ訪ねたか、忘れてしまった。

すべてを直接に指し、言うことが

傲慢にならないためには、

わたしはすきだ

うたを うたわう

と躊躇なく断言しなければならぬ。

雨はたしかに土にしみこんで

相原も橋本も、八王子も

忘れられない風景になる。

きみの夭折の意味を考える。

命がけで すきになるということ

わが身にかえってくる埋められない空隙。

桃子は生まれ、陽二は生まれ

とみ は若く美しい。

うたを うたわう

死が開く生

あなたの夭折、私の長寿
だれも羨みはしない

すきか

うたが

雨の日

さまざまな心が降るとき
わたしはすきだ。

ヤムタラ帝紀

ヤムタラの最初の王とされるのはヒノクマの名で知られるものだが、おおむね神話上の存在と見なされている。ヤムタラ帝紀のなかで初めて事蹟をあらわしたのは、それから十代下ったパロムであり、またその弟のヒマルであり、彼らは八つの邑を一つになして支配した。風の中の葦のような、草で出来たささやかな邑々である。そこにはグラベアの密林とオリザネゆたかに生える草原と蛇行するレノの大河があった。パロムはその経営に力を尽くし、憔悴して神上がった。ヒマルも次の王として全力を尽くしてから神上がった。パロムに子はなく、正嫡はヒマルであった。ヒマルの跡取りは三人いて、みな母を異にしていた。そしてその母たちは、それぞれが妃たるべき家の血筋から選ばれたものたちである。ヒマルは伝統に従って、その実妹を名目上の妃にしていたが、生みの母たちこそがその王統を支配するものだったのである。跡取りたちは、年の順から、パマル、パパスミ、ラミと名づけられた。生母の家々から使者が立てられ、ヒマルの遺言どおり、八つの邑は分割されることなく、一番年下のラミに継承された。パマルとパパスミには、それぞれ草原の獲物、大河における漁の権利が安堵された。ラミには女きようだいがいなかったたので、やむを得ず、名目上の妃を母の姉の女むすめ、つまり平行従姉からもらい、妃はそれまでラミの後見役であった女が格上げされた。ラミにもヒマルと同様、八つの邑をそれ以上に拡張しようという意思がなかった。パマルは老いていたので、草原の獲物だけでじゅうぶんだった。しかるにパパスミは、河から揚がる漁の一種ではない点に、常に悩みをかかえていた。これでは一族は食ってゆけないのだ。パパスミは思い切って、彼に与えられた小さな草葺きのヤシキを引き払い、邑を出て、流れに沿って大河を溯ることに決めた。溯行すること一週間にして、大きな三日月湖と夢のような虹の架かるグラベアの疎林を見た。舟から上がってその舟を壊し、ひとまずは野営地の焚き火の薪にした。夜遅くになると、三日月湖のまわりから、ジャガーや火食鳥や黄金猿やその他ももろのモノたちが、パパスミ一族に寄り憑いたのである。これがパパスミ系の最初の祀りとされている。ここが八つの邑からの飛び地ということになった。ここまでを版図としてヤムタラと呼ぶのである。伝説のヒノクマ以降、ヤムタラにいるものは一つの誇りとして、耕す、ということを行わないので、パパスミた

ちもまた漁労採集のわざのほかは行わない。ものがあれば採集し、すなどつて、無ければ大地を滑って移動してゆく。飢えれば絶えてその記憶さえ残さない。野のユリを見よ、ではないが、八つの邑と一つの飛び地からなるヤムタラという王国も、ジャングルや三日月湖の果てに、ある日、幻のように消えてゆく存在なのかも分らない。パパスミから始まるあたらしい王統があつたのかどうか、これも確かめるすべはないが、密林の中に、突如複雑壮麗な構造と装飾とを有した寺院が出現したりする驚きは、文字どおり、ヤムタラの不思議というべきである。ちなみにラミの系譜はいまだに続いていて、祭祀は現在でも厳重に執行されるが、当主など、すっかりハンバーガー肥りした気さくなボート屋の主人である。そして数種類あつたヤムタラの言語のほとんどは絶滅した。それらはすでに祈りの言葉の中にしか存在していない。

*帝紀とは旧辞とともに、古事記・日本書紀の原資料となった、現在は散逸して伝わらない書だが、これをヤムタラ書の仮の名づけとした。いわば王たちの系図である王統譜、皇統譜にあたるものだが、実は潤色と誤伝と幻想に満ちた神話群の、失われつつある記憶なのだ。それはこの書の「グラベア樹林篇」という題名が指し示すもののように顕現している。これまでも幾度か繰り返してきたように、「グラベア」とはヤムタラの精神的な中心という性格を持つ。ちょうどマテ芋やオリザネが、米や麦やトウモロコシのごとき、かの土地の中核となる食糧として、人々の心の奥深くにまで入り込んでいるように、だ。そして、「樹林篇」というのは、一つの密林状態を表すイメージを示し、入り組み、錯綜を極め、見通しがたい、相互に絡み合う世界の諸神話の様態を喚起させる。それは、フレイザー卿の描くネミのディアーナ崇拜

にまつわる森の王、黄金色に輝く一本の枝から、レヴィイストロースの南北アメリカ大陸に華麗な舞踏のように輻輳し、祖霊たちが跋扈する諸ヴァリアントに至る、驚くべき豊饒と危険と禁制を伴った密林なのである。そこは香り高く匂うグラベアの影深い木陰で、蔓草の狂おしい葛藤と下萌えの涼やかさに覆われ、よくは見通せない頭上から冷たい宝石に似た木漏れ日が、愉楽のようにも、苦痛のようにも降りそそぐ。これらのように神話相互は葛藤し、深層でつながり、ずれゆき、映発し合いながら互いが互いのメタファーとして、おのおの姿を他者の鏡面に発見するのだ。しかし、人類はすでに大いなる夕暮れの中にあるのかもしれない。多くの種が絶えて、「多」なるものが失われつつある現在、絶滅が危惧されるのは、次にはヒトの幻想なのだとと言える。レヴィイストロースはその『生のものと火を通したものの』の「序曲」

で述べている。《歴史家にまず認めていただきたいのは、アメリカ先住民に中世があったのであり、彼らの中世にはヨーロッパの古代ローマに対応する時代がなかったということである。彼らは昔から混沌とした集団であり、いくらさかのぼっても異文化の混在であり、その組織は非常に緩やかであって、その中にはあちこちに、高度の文明の中心が何世紀にもわたってある一方で、その文化に属さないひとびとがいて、中央集権的傾向と細分化の力が働いていた。細分化の力が勝ちを占めたのであるが、それはさまざまな内的原因の作用の結果であり、ヨーロッパからの征服者の到来のせいである》。あるいは、「多」なるものの喪失の果てに、ついにわれわれには、このように大観される事態が到来してくるのかもしれない。かぎりなくフラットになった末にやって来る、細分化と亡滅の事態が。しかり、ヒノクマからつづく系譜の最後に位置するボート屋の主人は、われわれ自身の姿でもあるのだ。

断食

40歳になるちよつと前に一週間、断食をしたことがある。そう決意するきっかけがなにかあったはずだが、具体的に思い出すことができない。仕事で疲れていて、体を立て直す必要を感じていたこともあるし、たまたま入った現場で、晴耕雨読の生活をしているお爺さんから、断食の話であれこれ聞かされたことも影響していたと思う。

そのお爺さんの健康法というのが妙に説得力があった。いま思うと、おそらくまだ60代だったのではないだろうか。話しぶりが淡々としていて、在野の哲人のような風格があり、じつに魅力的な人だった。孫の少女に「おじいちゃん、知らない人にそんな話を押しつけてやだめだよ」とたしなめられて、にこっとする笑顔にも、どこか生真面目な気配が漂っていた。

若いころ結核にかかり、貧しさのせいである栄養も摂れないまま、働きづめの生活をしていたらいつのまにか治ってしまった、という経験から、饑餓状態が体にいいらしいと思うようになったのだそうだ。

癌にかかった二十歳くらいの若者に断食療法を薦め、一緒に三週間ほど断食をして、おかげで若者はすっかり回復したものの、その後、油断があったのかどうか、食生活が乱れて癌が再発し、結局は亡くなってしまったという話もしてくれた。断食そのものよりも、そのあとの食事の摂り方が大事らしい。

わたしが断食した場所は自分のところではなく、友人のアパートだった。家族と一緒に、やり抜く自信がなかった。トヨタの工場に長期で出稼ぎに行っていた友人の部屋を借りて、一週間閉じこもった。横になってテレビの料理番組をみながら、断食が終わったらこれを食べよう、あれを食べようと思いを巡らし、ささやかな幸福感に包まれていたのを

覚えていた。

餓えを感じたときは、冷蔵庫の水を口に含んでがりがり嚙り、そのまま流しに吐きだした。水は飲まなかった。水を嚙るたびに、なぜか罪悪感を覚えた。一週間たつて図書館に行き、断食の本を拾い読みしていたら、一週間水を飲まないで死にますと書いてあったので、そこであわてて断食を中止した。お爺さんの話では、水を飲まない断食も昔のお坊さんたちはしていたようなのだが。

断食のあと、やはりお爺さんの教えのとおり、いも、ニンジン、こんにゃく、ごぼうなどを味つけをしないで煮て、それを主食にごはんは食べないでパンを少し嚙るだけ、という食生活を二ヶ月間つづけた。その間の体の変化で覚えているのは、草刈りの仕事をしているときにひどく臭い汗が出たことと、足指の水虫がすうっと引いてしまったことだった。

その半年後、原付に乗っていてトラックに撥ねられ、三ヶ月間入院した。手術のあとすぐにリハビリが始まったのだが、「ぐんぐん良くなるね」とリハビリ室の仲間たちに言われたのも、「理想的な血液をしています。わたしの血と交換して欲しいな」と医者にうらやましがられたのも、おそらく断食と復食の効果だったのだろう。

しかし残念ながら、それは40歳のときのわたしの姿で、62歳になった今は血圧の薬を飲み、脳出血をし、動脈硬化が進み、先の読めない体になってしまっている。

この20年のあいだになにがあったかといえ、よくない生活習慣をしていたとしか考えられない。というより、健康のことを考えない生活をしてきた。いや、考えはしたけれども、健康ということを深く理解し、実践することをしてこなかった。断食のあと亡くなった青年のように、どこかに油断があったのだ

と思う。

先日、老人ホームに入っている87歳になる父を、ふだんは無人がなっている実家に連れて帰った。冬のあいだわたしが東京にいるので、老人ホームから実家まで車でわずか一時間弱の距離なのに、帰ることができないのだ。父にとつてもわたしにとつても、ほぼ半年ぶりの実家ということになる。

電話で何度も、癌にかかった友人の見舞いに行きたいと言っていたので、最初にその人を訪ねることにした。父よりひと回り年下の元同僚で、去年まではどこかといって悪いところもなく、父のことをいろいろ気遣ってくれていた人だった。

抗ガン剤治療の最中で体が辛そうだったけれども、起きてきてソファに腰かけ、病気のことや手術の様子などを、父とわたしに話してくれた。ときどきトイレの壁に向かって用を足したりすることがある父の頭は、かなりぼんやりしているはずだが、見かけはちゃんと話を聞き、記憶も互角だし、受け答えにちぐはぐなところはない。友人も、長いこと鬱で苦しんできたという奥さんも、以前の父に對するように話しかけている。もともと言葉数が少なく、聞き役が多かった父なので、うまくごまかせているということかも知れない。父の認知症が気づかわれることがほとんどないまま、わたしたちの病気の話に花が咲いたのだった。

認知症のような病気には絶対にかからない、となぜかみんなに思われていた父が認知症になる。しかし、認知症にはなつたけれども、体に病気があるわけではなくて、食欲も旺盛だし、自分で歩いているし、会話に混乱が生じることは滅多にないし、ある意味、自然な老いを老いていると言えないこともない。なのに、父を兄のように慕ってくれているひとまわり下の友人や叔父たちが、癌にかかって入院したり、肝臓が悪化して一日おきに通院しなければならぬ体になっていたり、リュウマチでほとんど歩けなくなったりしている。さらにひとまわり下の、わたしの同級生たち

も、何十年ぶりかで会った8人のうち男4人が、大手術のあとだったり、癌の闘病中だったり、脳出血したわたしよりも大変な体になっている。すでに亡くなった中学時代の野球部の後輩もいるし、半身不随でリハビリ中の、子供時代の年下の遊び仲間もいる。父の年齢まで生きるとは、わたしたちの気持のなかではもう、夢の世界になりつつあるようだ。

ほんとうなら、80歳を越えた両親の老いをわたしたちが静かに見守ってあげるのが自然なのに、老いや死の影が父や母を乗り越えて、わたしたちにじかに降りかかってくる。

こういう社会はどこか異常で、なにかが崩壊しかけているような気がする。目に見えない抵抗できないものの力で、われわれが無力にされているようだ。健康は若い人たちにたっぷりと宿り、老いていく人たちから徐々に薄れていくのが自然な流れで、そのような流れに浮かんで流されていく社会の方が、実りとか厚みのようなものを実感できそうな気がする。われわれの運命が、絶対的な死に囲われた儚さの上に成り立っているのだとしても、そのような生き方の方が、少なくとも呼吸が楽なのではないだろうか。

わたしたちにとつて、体とはなんなのか。わたしたちが生きてきたのか、それともわたしたちの体が生きてきたに過ぎないのか。自分の体について知ることなく過ごしてきたせいで、自分についての認識も曖昧なものになる、ということがもしかしたらあるかも知れない。平穩無事に歳をとつていく自然な流れの中では、曖昧なのが人生、と言つて済ますこともできそうだが、知らない世界から足を掬われることがこんなふうに頻繁に見られるようになってくると、自然な流れを身を感じるだけのことさえあやしくなってくる。

自然な流れなどいつの時代にも存在していない、運命も世界もただかき回されて濁るしかないものだった、というふうに考えることを避けようとするなら、とりあえず、健康になろうぜ、長生きしようぜと自分に呟き、深呼吸する程度のことにはしてみたい。

岩田英哉

Hart Crane を読む。

I Hart Crane を読むためのレジメ

Hart Crane は、1899年7月21日にアメリカのオハイオ州に生まれ、1932年4月27日に、メキシコからニューヨークに帰る途上、船の上から身を投げ自殺して、その生を終えました。享年33歳。

彼が、10代に書いた(今残っている)最初の詩の題名、C33という題名が、既に一生の時間の長さを暗示していたとさえ思われるほどです。(C33を読みますと、Hart Crane は、この詩を書いたときに既に男色者でした。)

2012年6月2日(土)に、ミッドナイトプレス社のご厚誼により、Hart Crane についてお話をする機会を得ました。

そのときの原稿の一部を、*tab*に掲載して、ひとりでも多くHart Crane の詩の素晴らしさを知って戴きたいと思いました。

わたしがあなたにお伝えしたいことは、次の3つのことです。

1. 偏見なしに、男色者の詩を男色者の詩として読むということ。
2. Hart Crane の詩の言葉の美しさを知ってもらいたいということ。
3. この詩人の創造した、言語による複雑な多義的なコンテクストを体感して戴きたいということ。詩とはそのような芸術だということ。

当口が「上記の目次」 Black Tambourine と Brooklyn Bridge との2つの詩を読むことを通して、上の3つのことを、当日の聴衆にお伝えしましたが、ここでは紙幅に限りがありますので、下記の目次のうち、「1. Hart Crane を理解するための練習」をお届け致します。

もし The Bridge が何を意味しているのか、また Brooklyn Bridge という詩を読みたい方は、Midnightpress 社のホームページにてご覧いただけます。当日の全体の説明資料が揭示されつるごま。

当日の演題の目次は、次の通りでした。

1. Hart Crane を理解するための練習

(一) Black Tambourine を読む (第一詩集 White Buildings から)

- 1 白く建物 White Buildings とは何か
- 2 男色と男色者であることを意味する記号と暗示
- 3 表の訳と裏の訳

2. The Bridge とは何か

(一) The Bridge とは何か 題名の意味

- (2) The Bridge という詩集の体裁（聖書の体裁のプロローグとエピソード）
 (3) The Bridge の構造（わたしの仮説）

3. To Brooklyn Bridge を読む

- (1) Proem という詩…何故 To Brooklyn Bridge の To は斜字体なのか
 (2) フルックリン橋についての構造（白く建物とエピソード）
 (3) フルックリン橋についてを読む
 (4) 表の訳と裏の訳

4. Hart Crane を理解するための練習

To Brooklyn Bridge を読む前の練習として、第一詩集 'White Buildings' を、Black Tambourine を読んだことと同じく読む。この詩を読む、理解を促すために、To Brooklynbridge の理解が容易になるように、以下の詩を読んだものでも、ここでは Hart Crane の最初の詩集 'White Buildings' の中の練習の詩でも。

Black Tambourine

The interests of a black man in a cellar
 Mark tardy judgment on the world's closed door.
 Gnats toss in the shadow of a bottle,
 And a roach spans a crevice in the floor.

Aesop, driven to pondering, found
 Heaven with the tortoise and the hare,
 Fox brush and sow ear top his grave
 And mingling incantations on the air.

The black man, forlorn in the cellar,
 Wanders in some mid-kingdom, dark, that lies,
 Between his tambourine, stuck on the wall,
 And, in Africa, a carcass quick with flies.

最初の詩集の表紙 'White Buildings' という意味では、この題名の詩が、詩集の中にお
 らぬというところがある。White Buildings という題名は、この詩集の題名で、白く建
 物の詩を題名として練習として読む。この詩は、この詩集の例として、Black
 Tambourine が、中絶して、題名は、この詩

- 2 題 (1, 3)
 1 題 (2, 2)

として設計し、構築した詩が、Black Tambourine ということになりませう。実際には、後述するように、この詩は、その歌い方からいって、

1階 (1、3)
地階 (2、2)

という構造になっています。

先回りをすると、地階とは、地獄という意味でもある。舞台は、cellar、地下室であり、夜な夜な男色に耽る男色者の牢獄であり地獄です。(cell という同じ地獄、牢獄、監獄を意味する言葉が、やがて To Brooklynbridge じよび来ませう。) 辞書は Merrian-Webster Online を使います。

この詩を訳してみまじょう。普通に訳すと、こうなります。わたしは、表の訳と呼んでいます。普通に表面的に読んだら生れる読みのことです。まじ、第1連から。

The interests of a black man in a cellar
Mark tardy judgment on the world's closed door.
Gnats toss in the shadow of a bottle,
And a roach spans a crevice in the floor.

【表の訳】

とある地下室に、ある黒い色した男が独り
その男の興味と関心が、
世界が閉じた扉なのか、それとも扉が閉じて世界を締め出したのか
その扉の上に、遅れた(遅い)判決文をしるす。
吸血の蚊共が、ある壺の影の中で、休み無く、行ったり来たり、登ったり降りたり、
そして、一匹のゴキブリが、床の中のある割れ目に、身を伸ばして、架かっている。

しかし、これは一体、何をいつているのでじょうか。そう考えながら、裏の訳を試みてみまじょう。Hart Crane は、この詩の中にいじものように暗号を隠しています。あるいは、詩を暗号化して、裏の詩、すなわち男色者の喜びと悲しみを歌う詩としても読めるように書いています。

この詩の題名から見てみまじょう。

Black とじょう色の名前がつけられてじょう。

これは、詩集の名前である White Building の white、この白と対極の、それゆえ Crane の詩の中では、互いに相通じて最後には(浄化されて)反転してもう一方の意味になる、そのような黒、即ち罪深い、穢神の、背徳の男色者の黒という意味です。White は、それに対して、浄化された、汚れの無い、男色の罪の赦されたという意味です。それが、White Building の意味である、そのような作品群が White Buildings じゃ。

詩を building することで、文字通りに垂直方向に言葉の建物を階層化して立てることで、更に、そうやって構築された詩が、男色者の罪を赦されるものとしてある、そのような祈りの詩とすることで、white になる男色を歌った詩、これが Hart Crane の詩なのです。

Tambourine とは、同じ詩集の中の別の詩、Chaplinesque で述べた、チャーリー・チャップリンの主人公がかぶっている黒い山高帽、black hat と同じものを指しています。あるいは、The Bridge という別の詩集の冒頭にある To Brooklyn Bridge (この To は斜字体でなければならぬ。その理由は後述します。)、その詩の中の『連日の最後の行は』、the same screen と歌っているものと同一の物、男色者が使用する性具です。

それは、何かタンバリンのような形をしていて、あるいは山高帽のような形をしていて、円環の枠に柔らかな布をスクリーンとして掛けてある、そのような代物、男色者の性具。これをどのように使って、そこから複数の男が快楽を引き出すのか、わたしは一寸想像が難しいのですが、しかし互いに役割を演じ分けて、ホストとゲストになって、それぞれサービスを提供する側と享受する側になって、互いによるこびを分かちあうのです。

同じ White Buildings の中にある Chaplinesque という詩を読みますと、その場合に、往々にして、男色者は、自らを中世の騎士に喩えて、その役割を演じ、ということ、ゲストになり、ホストである貴婦人からの、性的にはどういふものかはわからないが、褒美をもらうという、そのような劇を演ずるのです。このように、男色者たちの性行為の世界は、非常に高度に洗練された文化の世界です。

(Chaplinesque とは、そのままだ表面的に読めば、チャップリン風とかチャップリン様式という意味ですが、Crane は掛詞と縁語の名人です。裏の意味では、Chaplinesque は、Chapline's que の意味で、真つ黒な男色の罪に汚れた男色者達の肛門性交の列、肛門性交の数珠つなぎという意味です。このように Crane の詩の題名には必ず男色の意味が掛けられ、隠されています。詩そのものについて、言ひざるもあつた。Black Tambourine や Chaplinesque は、ほこの一例です。)

かく、Black なる色は、そのまゝ色だとして、兼は Crane は、それ以外に、white は勿論のこと、purple、gold、green、violet、amber、grey、sapphire、red、pink、blue など、色彩を詩の中にちりばめていて、天体の場合と同様に、いかに色に関する Crane の創造したシステムがあるものと思われます。Amber や sapphire は、色彩ばかりではなく、もうひとつある鉱物の名前のシステムと腫を接する色彩語だと思えます。これらの言葉の体系については、また後日探究することにしたと思います。

(この稿について)

象徴の魔力 四

前回、上田敏『海潮音』に見るダナンツイオとファシズムの關係に触れ、日本近代詩が背負った宿命性にまで言及したところで、一つまた蒲原の詩に戻りたい。

繫縛

繫縛人を賣むとか、黒鐵をも
黄金と輝やかしなば、その鎖に、
かの天走る宮地の星のごとく、
つなが行きてぞ妙音世をばふるふ。
身肉愛をさへぎる白壇とか、
ああ、また罪の芽やどす汚穢か、そは、――
清きを、わかき熱きを盛りなす時、
靈の手これ將た讚むる日の高杯。

かかる世、かかる身をこそ、われ等二人、
再び保ちがたしと樂しむなれ。
大華生羽たまたま肩よりぬき、
まことや、君がかへたる口づけには
岩根に凝りて埋みしわれ玉髓
光明にいつしか融けて流れ出でぬ。

これは『海潮音』と同年、明治三十八年に刊行された有明の第三詩集『春鳥集』に収められている詩である。その意味の読み取りができないまま、私はこれを何度も読む。「繫縛」、「鎖」、「身肉」、「罪の芽」などなどの暗黒のエロスを呼び起こす単語の配列と「……とか、……とか」といった妙に口の中で異物が割れるような韻の突き出し方に、なんとも言えない読みの快感をおぼえる。意味を探ろうとずいぶん前に渋沢孝輔の『蒲原有明論』を読んでみたが、その解説は私の想像していたエロティシズムとはほど遠い、単なる恋の歌として捉えていてつまらなくがっかりしたが、それでもやはり自分なりの味わい方が離

れず、夜な夜な読んでみたくなる。

いまこの詩を挙げたのは、何もここで私なりの詳細な解説を試みたいわけではない。おそらく渋沢の考察が「正解」であつて、もし詳細を知りたい方がいればそちらを参照してほしい。ただ私にとつては有明詩に注釈をつけること自体がどうもはばかられる。それによつてその「魔力」は殺されてしまうからである。

むしろいま私が探りたいのは、こうした一見難解かつ観念的な、詩人の内閉世界を描いたような詩に、実のところいかに社会、国家といった大いなる「他者」との關係性の綾が結ばれているのか、ということである。そしてまた、ある時代に、ある国に生きてしまつたが故にどうしてもこのような詩を書かなければならなかつた詩人の宿命を掘り起こし、そのことがいかに一つの詩語、一篇の詩のスタイルをかくあるようにさせたのかという必然性を見出してみたいのである。というのも、そうすることで前回述べたダナンツイオとファシズムの關係性や、上田敏によつてそれがもたらされた日本近代詩の宿命性との連関が見えると思えるからである。

なぜそのような面倒なことを考えるのかと思われるであろう。詩作品は詩作品のまま味わつていけばよいのだ、という考えもある。私もこれまでではそうしてきた。下手に「解釈」を加えることは先に述べたように極めて危険である。ただ、詩と「他者」との關係性を自分なりに炙り出すことによつて何が見えるかといえは、すなわち詩を読む「現在」の私の中に折り重なっている「他者」なのである。例えばダナンツイオの詩に魅力を感じるのであれば、その詩作品に内包されるファシズム思想の芽は、いかに頭で否定しようが確實に私の中にあるもののはずである。そうで

なければ魅力など感じるはずがない。それを正確に捉えることができなければ、今後詩を書いたところでろくなものは書けそうもないと考えるのである。

とはいえそのようなことは簡単ではない。特に蒲原有明の象徴詩においては至難の業と言えよう。そもそも社会、国家といった「他者」とは切り離された、いわば観念界で醸成された「詩のための詩」とでも言うべき芸術至上主義的代物であつて、むしろそうしたことを語るならプロレタリア詩や民衆詩といったものが適しているともいえる。実際蒲原以降、反動としてそうした詩が流行し、象徴詩は衰退したのである。

ただこの点、実は私はやや皮肉に捉えており、声高に社会的メッセージや、大衆の動員を目論んだ詩こそ、極めて個人的な内閉的な詩であると考えている。というのも、対―社会、対―国家、対―大衆、といった「対」によつて成り立つ関係は、そもそも「個」を絶対的拠り所にしなければ不可能である。詩人は、自らの存在を「現実」のある特定の立場に確保し、「人々よ、社会よ、国家よ、私の声を聞け！」という風に、詩語を「私」へと従属させなければならぬ。以前も書いたがこの「私」を疑うことなく、あるいは「私」のうちの「虚」を見つめることなく、「他者」と「対」の関係を築くことは、「私」を「現実」下に相当の努力によつて仮構し、演じ、そして封じ込めなければならぬ。おそらくそうした詩が権力に敗北し続ける根本は、俗にいう反権力が力を持つて権力へと反転する一般原理とは違い、この詩人の「私」への絶対的封印がかなり大きな理由としてあるのではないかと考えている。なぜなら「私」という符牒はそれ自体、現実界の隅々まで網を広げる国家、社会システムを支える根本の最小単位であることを免れ得ないからである。

待て、私は戦っているのだ、とある詩人は言うかもしれない。しかし少し考えれば誰でも分かるが、人間存在はそもそもあらゆる「他者」の複合物であり、多様な側面をもつて

成立している。特に近代以降に発明された「個人主義」もまた一つのイデオロギーとしての「他者」である。そのことこそが現代の「私」の二重性を生み出し私たちを苦しませているのである。その複雑極まる「他者」の折り重なりが「私」であることを知るとき、それでもなお「個」の自由を見出さんとする詩人は必然、根源なる「私」を求めて己の内の様々なる「他者」の綾を潜り抜け、それこそ蒲原が「涯なきやこの静けさや、／めくるめくおそはれごち、／涯もなき夢のとどろぎ。」と喘いだ「底の底」(『有明集』)にまで至り、そこで口を開けている「虚」を見出さざるを得ない。そこにおいて初めて詩人は分かるのである。「私」とはついに「不在」である。

つまりそこまで到達して詩人がなおも「他者」に「対」して「戦う」のであるならば、その詩は存在しながら不在であるという矛盾が述べているのかさっぱり分からない、ある不気味な、底知れない言葉の羅列とならざるを得ない。何も奇妙奇天烈なスタイルであるとは限らない。むしろ整然と整理された詩型もあり得るだろう。「不在」が深ければ深い程、言葉は削ぎ落されていく。いずれにしても詩語はそこにおいて、幾重にも「他者」の渦となつているのである。

では、その「不在」なるところになぜ蒲原は「象徴」を持ち込んだのか。単に当時西洋において流行していたが故のことであるのか。ここで蒲原の言葉を少し引用する。

「象徴といふ字面は、対訳語として用いられて来たがわたくしはその出典を詳かにしない。多分仏教の論部の述語に起原(ママ)があるのではなからうか。華厳玄談に出てゐたやうに思つて後から搜索して見たこともあるが、それは遂に徒勞に終つた。わたくしの記憶によれば、森鷗外博士が「目不醉草」に連載した「審美新説」(フオルケルト所説)に出てゐたのが、わが文芸界では始めであつたかと思ふ。さうして見るとこの象徴の熟字も鷗外

博士の手で、仏教語を参酌して造られたと称してもよいかもしれない。」

これは大正三年初出「象徴主義の移入に就て」の一節であり、明治の近代日本語の生産期に「象徴」の発明にまず着目している点は、言葉の魔術を用いる詩人としては当然と言える。そして「Symbol」の訳について仏教用語を用いたのではないかという憶測は、晩年に仏道に至る有明らしい考えでもあり、かつすでにその始めから詩人は日本においてこれから試みられる「象徴」の作用が、独自の重層性をもつて發揮されなければならないことを熟知していたことがわかるのである。そういう意味では、単に西洋の象徴主義の表層的模倣者ではない、日本象徴詩の完成体を生み出した詩学の本質にまで通じる極めて重要な点である。その点を考える上でも、さらに興味深い一節がつづく。

「わたくしはこゝで先づこの「審美新説」がわが邦の自然主義の勃興に眼々の感化を及ぼしたことを云つておきたいのであるが、それのみならず、その釈義に於て、自然主義が強い象徴主義、神秘主義と齟齬扞格するものでなく、近代思想の及ぶところ相関聯するところありと説いてあつたことを憶い起すのである」

詩人が象徴主義や神秘主義なるものが、自然主義と対立するのではなく、連続したものであると捉えているところは、おそらく当時において（あるいは今も猶）ほとんど理解されない奇妙な話といえる。その詩は明らかに自然主義的なる要素はゼロと思えるのであるから。しかしよく考えてみると、この詩人の発言はかなりの根拠を持つていることが見えてくる。そして先に述べた「私」の「不在」性と「他者」性の関係が浮かび上がってくる。やや長いがもう少し読んでみる。

「……マラルメは物象を静観して幻想を喚起するといふが、必ずしも静観に伴ふものとも限られない。感覚状態の錯綜を極め、可見不可見を絶した内部現象を以て仮称してよいものならば、かかる状態を喚起するには、生来

の敏感と共に、また別の官能上の手段を要するものである。こゝに幻想の近代性がある。幻想とは結局感覚の境界の上での因陀羅網である。…（略）…

マラルメは静観によつて一種の悟道に達したかも知れぬが、ヴェルレエヌは文学の重荷を極度に嫌つて、その詩を鳥の声に解放し、ニュアンスの黄昏に褪せしめて、「秋の歌」の如き遺瀨ない單純さを揺曳させるのである。彼だからまだよいのであるけれども、これが凡庸の手に渡れば、すぐ街頭の歌謡に落ちてゆくのではないかと危ぶまれる。自然主義に於ける環境と象徴派に於ける情調とは、それを押詰めてみるときに、共に類似した作用を起すものである。人間の個性が没却されるからである。」

ここで蒲原が「幻想の近代性」すなわち「感覚の境界の上での因陀羅網」と述べるころは、気をつけなければならぬ。決してこれは単に詩人が「象徴」作用によつて發生する「幻想」を、形而上的な宗教的教義へと結びつけているのではない。「感覚の境界の上での因陀羅網」とは、「別の官能上の手段」によつて生まれる、つまり性的なエクスタシーを主とした「身体」的官能によつて生まれるものであつて、これこそが「近代」的幻想であるとしているのである。従い「悟道」に至つたマラルメよりも、「街頭」で酔いつぶれるヴェルレーヌをよしとし、するならばもはや、自然主義が生み出した「環境」、あのボヴァリーや、ナナの破滅的肉体の世界、人間の欲望の本性に支配され、人間の「個性」など無慘に殺されていく世界と何ら変わらないのである。

この蒲原の「自然主義」と「象徴主義」の一致点は、「繫縛」の詩にもよく現れている。「繫縛」が喚起するエロティックなる本性の喜悅は、「繫縛」なる、仏教語による煩惱に迷う状態と一致するのである。私はこの蒲原の徹底した「理論」と「実践」に驚愕し、かつこれを愛するものである。もはやここまでくれば蒲原の象徴詩をただ過去の難解奇怪な産物として返けるだけでは許されない。すで

にこのとき日本の詩は、「象徴」という借り着の中で、ある大いなる「他者」を呼び込んでしまっているのであるから。すなわちそれは「Symbol」を仏教語の「象徴」によって翻訳せざるを得なかった「近代日本」の迷える幻想そのものである。この明晰な詩人は知り尽くしていたはずである。「近代日本」とは、「近代日本語」とは、そして「近代詩」とは、何者かの手によって偽造されたものであり、まるで幻燈機によって映し出された幻のごときものであると。詩人は先の論でこうも述べている。「考へて見ればわたくしの肉身もまた一個の幻象（ママ）にすぎない。」と。

ここに「現代日本」という名の「他者」の光源を読み取るのは、また早計すぎるだろうか。夜な夜なその詩を読んでは快感に浸ってしまう空っぽの「私」には、どうしても蒲原の象徴詩は「現在」をも投射していると思えないのである。

confidence

金環食の間のサルやペンギンの異常行動についてテレビでやっていたが、一番の異常行動をとったのは人間だと思う。みんな変なメガネをかけて、一斉に空を見上げていたのだから。(後藤)

今年もセキレイが巣をつくったようだ。材木の山にはなく、ブルーシートの小屋のなかの薪の山に。暖かくて、悪くない場所だと思う。わたしにとっても、材木を動かさなくなるのが避けられたので、大歓迎。愛の営みも、初めて目撃した。去年よりも人なつっこくなっているような気がする。

(木村)

6月2日にミッドナイトプレス社の主宰する第10回ポエトリラウンジにて行ったわたしのハート・クレインについての講演資料の一部を今回Eメールにてご披露致します。お読み下されば、誠に嬉しい。これ以外の資料も含め、全体の説明資料は、後日ミッドナイトプレス社のホームページに掲載されますので、お読み戴ければと思います。その資料には、ブルックリン橋にての各連の解釈と語釈、表の訳と裏の訳が含まれております。わたしのクレイン詩の解釈は、恐らく世界中でだれもしたことのない解釈だと思えます。わたしの話を聴いた方のひとは、口あんぐり、とそういつておりました。ただただ作品のテキストに虚心坦懐に向き合い、読み込み、辞書をひいたというだけのことなのです。(岩田)

父は施設の皆様のおかげで寝たきりから普通の車椅子に乗ることが出来るまでに回復しました。時々、家に連れて帰っています。何時間か過ごして、家からまた施設に

戻るとき、「あれ?どこ行くんな?」と言います。(福島)

今、オーディオに、熱を上げています。初めはPCオーディオについて解説している雑誌などを集め、ばらばらとながめていたのですが、いつものようにそこで飽きてしまうこともなく、興味はどんどん深まって、今読んでいるのは、そのものずばり「Stereo」です。買い物依存症患者の僕にとって、これはあたかも、天から与えられたかのような「道楽」だと思えます。CDを集めるだけでも、時間と財力(これは僕にはありません)とが刺激されるといふのに、1台300万円もするCDプレーヤが存在する世界ですから、もともと音楽を聴くのが好きだった僕がこの道楽にのめり込むのも無理はないと言えましょう。ただし、僕の居住空間は借り物なので、スピーカーから爆音を流すことは出来ないのです。しかしそこはよく出来たもので、ヘッドフォンという世界が、僕を待っているのです。現在、どの「サラウンドヘッドフォン」を使ってみるのが一番いいだろうか、と、嬉しい悲鳴をあげている昨今なのでした。(野村)

この所、いわゆる広告宣伝の手法が「戦略」として肯定される場合と、「犯罪」として非難される場合の違いについてずっと考えている。例えば、その昔、青山にハーゲンダッツの1号店がオープンした時、長い行列が出来たことが話題になったが、列に並んだ大半の若者はアルバイトのスクラであった。このケースを始めとして、「土用の丑の日と鰻」あるいは「バレンタインデーとチョコレート」といった商業風習の

創案やデモンストレーションについては、そこに多少の嘘や誇張があったとしても「許容範囲の戦略」として肯定されることが多い。これに対して、昔からある「るるぶ」などの（既に消費者に見抜かれている）記事広告やバラエティ番組に挿入される露骨な「番組宣伝」、ネット上に氾濫している関係者や業者による賞賛口コミの捏造には「犯罪」の匂いがあり、詐術として非難したくなる。その違いは感覚では分かっているも、うまく説明するのが難しい。（秋川）

吉田秀和が亡くなった。音楽はもちろん、文学においても、これほど批評、エッセイ類でとくにその対象となる詩人、作家たちを生き生きと描いた人は少ないだろう。そのなかでも「中原中也のこと」は、ランダムに開いたどのページにも、必ずそこには何か確実な「思い出」（そう、吉田は生きていた、中原を實際知っていた、そういう世代の最後の一人でもあったろう）が刻印されている、そういう意味で類のないものだ。次のエピソードは私の好きなものの一つだ。〈彼（中原）が私（吉田）に最も好んできかせてくれたのは、百人一首にある、ひさかたのひかりのどけきはるのひにしづこころなくはなのちるらん

の一首だった。これを中原は、チャイコフスキーのピアノ組曲『四季』のなかの六月にあたる〈舟歌〉にあわせて歌うのだった。楽譜でお目にかげられずに残念だが、彼は、枕詞の「ひさかたの」は、レチタティーヴォでやって「光りのどけき春の日に」から歌にするのだったが、そこはまた、あのト短調の旋律に申し分なくびつたりあうのだった。私は、彼にかつて何をせがんだこともないつもりだが、もしこういうことが許されるのだったら、彼に、もう一度この歌を歌ってもらいたい。

私は、中原にあの独特の話しぶりや、黒

マント・黒帽子の姿から、要するに、彼の肉体に接しられる一切合財を含めて、この歌をきいている時が、いちばん彼の全体にふれてるような気がしたのである。―『文藝』昭和37年5月号』

朝日新聞の連載コラム「音楽展望」の柔らかな自在な文体。正直で苛烈な批評も音楽への愛としか言えない情熱（失われぬ情熱）のもたらすものだった。FM放送、あのしわがれた声で紹介された曲の眼目など、教わったことは一杯ある。それにしても、ディースカウ、畑中良輔、吉田秀和と音楽の人たちが連続して亡くなったのはそれぞれが呼びあつたのだろうか。ディースカウの死のとき、それに言及のない吉田秀和を思い、その健康のことを祈つたのはつい最近のことだった。（5・28、水島記）

今井勉『琵琶法師の世界 平家物語』というCD七枚DVD一枚のセットを購入。今井さんは私より二歳上の方ですが、当道座の伝統を伝承する唯一の方だそうですね。もちろんCD七枚で、平家全曲が録音できるわけはありませんが、伝承されている曲が鱧、卒塔婆流、紅葉、竹生島詣、生食、宇治川、横笛、那須与一だけになっているのです。ここに録音されているものがすべてです。なお、有名な祇園精舎の冒頭は、一度伝統が絶えてしまったものの、古い曲譜から復元して演奏しているそうです。ただ、このオトは非常に難しいですね。付属解説書によれば、いろいろな歌い方があり、それぞれに意味があるそうですが、ただ聞いていてもなかなかわかりません。（長尾）

最近、犬が留守中にハウスから脱出して部屋中を荒らしている。ハウスはしっかりと留め金で閉めているが、うまいこと脱出方法を覚えたらしい。何度留め金を固く付け替えても、どういう訳か部屋に帰ると部屋

が荒れていて、犬はうれしそうに尻尾を振っている始末である。もう七年超この犬とともに暮らしていて、こんなことは幼犬の時の単なる悪戯を除けば初めてで、おそらく何か私に訴えているものだと思えない。特に荒らしているものは積み上げられた本で、表紙は粉々に引き裂かれ、中身も部分的に噛みちぎられている。長年大事にしていた『立原道造全集』は完全にやられた。図書館で借りた『三島由紀夫全集第十五巻』もやられた。その他いろいろ。

それでも犬は私を慰めてくれる。もう詩や小説を読まずとも生きていけるようになったのだと、教えてくれるのかもしれない。私は決して怒ることはしない。とても賢く、優しい犬だからである。(中村)

この季節、ゆうがた歩くと夏蜜柑の花の匂いが縞模様のように漂ってくる。エジソンデニソフの交響曲はそれをネガにしたように聴こえる。初演は1988年、パリ。

(和田)

体のことがあるので、なかなか病院とは縁が切れない。ということは、私のような病気の後遺症をかかえた人間には、最先端の施設を有する病院との縁が切れないと言うことで、すなわち大都会から自由に脱出できないことを意味する。だいぶ体の調子はよくなってきたとはいっても、矢張り健常者のそれではない。このあいだ、区の広報が郵便ポストに入っていて、横浜市で「森林管理」についての講習のお知らせがあった。最近、森とか樹木、植物のことが気になってならない。どんなにつまらない樹や植物でも、ふと、いつまでも凝視している自分に気づくことがあるのだ。籠もっていた山から奇声を上げながら下りてきて、里の女たちから天狗がやってきたと恐れられた南方熊楠翁のことを思う。彼の

ように、私もできれば山に住んで樹や森の番をして余生を過ごしたいと思うが、第一に妻の強力な反対に遭うであろうし、まず適うまい。せめて足がもう少し動けばと思う。そんなことを考えつづけて、京浜工業地帯にありながら奇跡的に水と緑の比較的に豊かな現住所にかりうじて棲息している。以下は宣伝ですが、また性懲りもなく詩集を出します。『グラベア樹林篇』と名づけましたが、ちよつとフレイザー卿の『金枝篇』や柳田翁の『神樹篇』を剽窃してあります。私家版で限定二〇〇部、非売です。欲しい方があればおっしゃってください。

(倉田)